

## 巻頭言

福山平成大学 福祉健康学部  
こども学科長 三藤 恭弘

2019年はどのような年であったと、後世では位置づけられるのでしょうか。日本では平成が終わり、令和という時代が始まりました。停滞感の強かった平成の時代に、少子高齢化が一層進み、将来への不安感が社会に漂っています。

世界に目をやると、国家間の緊張が高まり、その関係性も複雑で一層困難な様相を呈しています。またその変化のスピードには脅威を感じます。

地球として見た場合どうでしょうか。気候の変動は明らかで、日本は毎年のように災害を受けるようになりました。募金もボランティアも一年中各所でおこなわれています。

様々な課題が山積する中、我が身の置かれた立場をふり返った時、地方の私立大学に勤める者としてこれらをどのようにとらえ、どう行動していくことが求められているのでしょうか。予測のたてにくい新たな枠組みが次々と現れる時代にあって、学生への教育については実質陶冶的能力（知識・技能）の育成はもとより、形式陶冶的能力（思考力・判断力・表現力等汎用的能力）への要求がこれまで以上に高まっていると言えるでしょう。また、教育と並び、大学のもう一つの使命である研究、学問の探究も、世の中の変動にあわせて追究していかなければなりません。福祉学科、こども学科、健康スポーツ科学科からなる福祉健康学部は、まさに世の中の変動とともにある学部学科と言えるでしょう。過去から現在、未来を見据え、人に、社会に寄与できる研究が我々に求められています。そのような意味に於いて、ここに今年度も学部紀要を発刊できたことに大きな意義を感じます。

最後になりましたが、本巻を発刊するにあたり、投稿して頂いた先生方、査読して頂いた先生方、紀要委員の先生方、事務方の皆様、正文社様に多くのご尽力を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。